湖月抄

乃書

49

923
M2K5

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

紅梅

細 巻ノ名以テ詞ヲ号ス之 詞 のこちらに紅梅とあるより名
乃此巻の并乃一也。或説竹川と一帖并とせり。其故ハ薫
幼少の時よりの事あるよりて也。されども紅梅竹
川とは次第もたがへり。此巻ハ竪の并とみえたり。但様
乃并ともいふべきにや 河 此巻ハ別して按察大納言
傳とみえたり。乃竹川と并の 二とも定めがたし。薫中
将竹川にみえ始ニ四位侍従中央ニ宰相級ニ中納言也。此
巻よりハ始より源中納言とあり。然ハ竹川乃次なるべし。又
中々又竹川の末つかた按察大納言右大臣なりぬとあれ
ハ又按察大納言といへり。不論此巻ハ竹川の中なるべく
し 三五日 三文田 不論此事也年紀の紀明入べか
らず。此巻ハ紅梅の大臣乃傳竹川ハ竹川の右大臣乃

7152

別傳(ベツデン)之志あれども其時代を引合せて見るべきにあらずや
此巻も竹川の中夫橋姫椎本總角と同時より
細 薫大一九二歳の事く紅梅三ヶ年の事あり此の
巻とし此書として十七八ヶ年の事なり也

その比 三 此巻端と三下よ
りかり。紅梅。橋姫。白露く
を心得るへき也。佛の所
説の經には。木時とてあり
しくしは比三下よりなり
佛の會場とて會して
く云く
按察大納言 三 號紅梅
右大臣。按察大納言ハ致大
臣の二男也 三 同巻
らうくしう
孟子のやうくしうとあり
同巻上臈しき云と
後の御なかこれらく
細 ひとまさとい作り致仕後
の御時也河海也仁さ年
古今よりの此わりと勢
いまうらし君と三(?)巻
まで後の代のおもて顯平
愚案 素寂抄に成卿
自然の事成抄とて
れより故四大臣野一名

そのころ按察大納言ときこゆるは故致仕の
二郎なり。うせ給ひにし衛門督の
のさしつぎよ。わらはよりらう/\しく
はなやかなる心ばへ物し給ひし人にて
なりのぼるよはひにそへて。まいて
世にあるかひありあらまほしうもてなし
給へり。御おぼえいとやんごとなかりけり。北の方ふ
たりものし給ひしを。もとよりのはうせ給ひて
今ものし給ふは。後のおほきおとゞの
御むすめまきばしらはなれがたくし給ひし
君を。式部卿宮にて故兵部卿のみこに
あはせ奉り給へりしを。みこうせ給ひて
後。このおとゞしのびつゝかよひ給ひしかど世

野語ノ又臣し思ひて入之後の太政大臣と今上の治世の比太政大臣二人之致仕太政
大臣髭黒之臣是也仍後とみゆ古今集に忠仁公と前太政大臣とつゞけられ前
後の例によりて延喜の比太政大臣只一人也此注不詳官前後
晄 後の字を用る 三 准延喜之例一条に後ハ後の字を前とひく用之
故先アつのみく 細 蛍兵部卿宮の事也 如
こと書くの第十七八年よりその御本に致仕大臣蛍兵部卿の前夫髭黒太政大臣に
てなき事なし

古文の法方よ 細 蛍兵部卿の
呼 按察の顔に蛍文
の所女一人は紅梅の方に
伍に今の宮文の蛍ひけ
あし
とかく 細 法にて見るれ
くし 晄 母のまくまら

て後忍びつゝかよひ給ひしかど年月ふれ
細 紅梅大臣の事也
ばえさしもはゞかり給はぬなめり。御
子は故北の方の御はらに二人のみぞおは
しければさう〳〵しとて神仏にいのりて
今の御はらにぞ男君ひとりまうけ
給へる。故宮の御方に女君一所おはす。
へだてわかずいづれをもおなじごと思
ひきこえかはし給へるを、おの〳〵の御方の人

なれどつぎ〳〵の人々なく
しきこともとてもすの
よくりそすかやく
あのうていそれくしう
蛍按察の君うち
上の人々ままのまま 三 世
えさらかあしかくても
よく 抄 紅梅の姫君
一人の宮の御方いつれも深き
ゆかし成とあるべし
西は中君 湖 西の方
殿の中君 三 麗景殿
の姉君あり故に中の
ことなりし

どはうるはしうもあらぬ心ばへうち
まじりなまくね〳〵しき事もいでくる
時々あれど北の方いとはれ〴〵しう
いまめきたる人にてつみなくとりなし
細 人の数をあり
我御かたざまにくるしかるべき事をも
なだらかにきゝなしおもひなほし給ひ
つゝきゝにくからずもてなし給ひけれ
ばめやすかりけり。君たちおなじほどに
すぎ〳〵おとなび給ひぬれば御もなど
きせ奉り給ふ。七間のしんでん
細 大君 麗景殿
ひろくおほきにつくりて南おもて
に大納言殿大い君西に中の君
細 紅梅の姉君也
東に宮の御かたとすませ奉り

やまとり文の四方のさとたく
人しようらどうかほどはちくさやのゆふく
とねんくうしれやうすれどしらすこうろさき
のねしうし猶ゆかしるどもろく内くの緞
式よく様子などこころふろてろさうくおもど
りそめしてけりひあしましうかわりとも
紅梅の娘達をさし
側のうくしづる結ぶらうくありてつさく
よろこうひつくさうて縫人ゆかりく内き
文よりれ氣色あれど内心八申ごろ文ゆえ
しまんいうそうりの人々は様れけるひ
よろしひなしんさりとてさらひよろり
ひげとくもらひするそくし。き文ふは左
三条上腹
夕霧のむすめ
のゆかりのく女猶ふゆしふくへるはけりてさ

くのことひてやいは
おうのこんへどりぐるふ
きよわらんろき
ひさうちふ 細 桂猶の腹の君
あく白文めしまいりて
結ぶうくし 義 紅梅の一子
隣子なま文ふらく

らひうふいばうしろひあくなれどさのとうひ
てやいひとよまさうんと云ふ女かやそうえ
づくまふうえていちよのかいらはあしく人と
紅梅の大納言
望しきうてまいらせむまりのふ十七八也
ほどふくいう門らしう白ひゆ順ららかう
しあつり中の君もうらすらいてあそうは
なまかりしふすえくろうう海いまくさりてお
しうかつそれたくて人へうそいあくうし
うららせまようされさう海をまうへのこやまん
きうと望しおうしハあしそ望しるこの
なぞてとどうらうそてなおしうけ縫ひさ
いめしまそうしうらふみれがうつさふ縫

せうとえうくのこゝハ
孟 紅梅の息乃大夫を云
弟にてハえやむまじ女と
あへてましく中君のめする
べし

きみんとこゝゆれそ
ちかうよびよせけのまよ
らうさし

とうの弁の　細 秋好中宮
宮まへまゐりてかくし女よ
を源氏の折ふしつかり給
ふべきをかゝそ伊勢
の大神宮…すまに
かれは…て 此云日大
御神…くしく

大夫の君のこと
かくへありて、行くあはしもうくまうこひ
こいつくしうかりげちぞうと統こそてのこゝハ　細 白衣の袖　箋 唐守りの服
君達をゆかしとく
ぐとし御網云よりとゝよむさじのあひうく
細 紅梅の大臣は隠上之
ごさいまんとさうしあれいふお志つそしいと　細 紅梅
大臣のこと
ひあはうらゝ笑しうらんへよおほとうんえつ　紅梅のこと　孟 此袖より紅梅大臣の詞ニ内へ
まいせんよりゝこと
くへよりいみえ夜ようしそハようりうら女がよ　白とのぼり
ハらせしそまつくしやれぎてうの
ゆくよまうりとそしうしづきてこせるよ命
孟 白と紅梅のこと
のびあべきさえのれきう海ありしのよひろう
まろ　おゆかしきこと表文のまいりのもく
ぐうらえ表ざえの御らうしとりそてこなのて
箋 紅梅の文段仕相
日の御乃れうしとりりもげ世よやうりるお　三 冷泉　三 弘徽殿
きそ、あ御もじの院乃女御の御ことゞ給ひし

よ后よハ藤氏の人へかうくきこえ后の給仰よりのそけるう也之
立后のきハしし女色紫上巻よあうしとりりぬ春日大明神の御ちかひのかえ源
朱雀院の御時長暦三年四月二春日大明神御託宣中云喜ニ云度ニ官幣不詣
之依非藤氏皇后也依之内大臣教通云一女可入内…宮之其年十二月内大
臣女真子入内為女御ト　今案長暦の託宣名物語以後のこと也然るよ物語
…くよ及く…かくへのよすかりしや　愚案 天照太神春日大明
神御契約のこと　日本紀神代下よあり

ひよいつくしうて
花…紅梅よりまされて立后
のりまゐらうしるすと

三 春宮
孟 むとのとさしいろをそ
ハトして按察の蔵て内り
サブラヒ
侍すかうて
師すくとくの御に海まま
ますかあされぞまゝとに
まくらうゝよりまりとなく

いつくしうてやさみるすくさめれっとも
らうたげに心のらうよいのりて多くを
大君の内裏よおいまゐらせ
まかりいと時めき給ひしへごさうらひ
かられまどらひのあれ給へおほどかに
三 按察君之 女御の継母之
くろくあうされうあうそるすくてはいりて
とて此方そひくつくひおまゝくこと
よりてきりとすくおうしつきくしかりて
孟箋
えゆ 宮御ハつまかくたらからて 西の御方
細 中の君之

母君がしくらうへまいり
またじ殿の内もつれく
ゆへとしるや

くうらまいりや　細　紅梅
の太宮の用ききて宮のまいろ
づりとりてかつりふやう

の内方南の内方と一りよ方ひしく
はひと川よ名くひきて、いとこうくし
うるさめ給ふ、細 堂念ぞ御女之 孟 瀬がりの兄弟之
くろうしよして寸給ふで、ありくいひ
とうへんよれしのごりしうが
らひくろくされ桂びわざとゝひわ
御のやうよ苦勢してぞ、桂とろし
そび給ふ、梅らうとせのつゐすへし給
て母小言まづん、さやうふは埒さくらしむ
ひそり給ふどうことるるすずてりてあし
給りのしらぐへけらひのむりれうき御
すゝんおいらく、つきまゐるうしこ。人
まりそくれまつりくしらまりやすゐよ

うろもりくとまり
まゐりくんと母よ
細 紅梅の太宮の網代殿の
君へ戸まうく宮ハおの
るまく 咲 母君ハ太君より
付まを春気へまいりしく
うしゆくハそれしりさ
この細をとりくりて又殿の
細よ内に居まふんそく
とり

ゆるくせぬよ　甲 文梅の姿
よハらぐくぬ細く居待丈
君の内果館汝身よま
せそくとく
のうそあかれはうしろめ
さくれと 孟 小言のまく
るりとうのうく　三 少方
の一瀬の殿ハ給とまうせ
まうごこそしくよみを
と御ハたんのうこそも
わしま御ろう内君とそ
もうしてるつゐへりしく

やと秋りこざ御とのこ去いそく、やくるゝら
とくぐうしおぐ堂しても、うへくへんを御
よ宮しぞくめてのすへ、母ありしくそ
つうゝやうくめくし、母君ふりも此子し給ふれ
人々はぶうらしうらへし。也くしをうよ
さふもあくぬくしこちすれハ、おうりくゐろ
うしにさやうのせつき、ふるさ御、去つり川へ
まらをてせよすゐんくざうりいうそうすれ
らん後ぞ家まうしろめくさくれどしくと
そむしくこめくしを、恐のつくへらくん
よおうりけさしとるくして、去くて給うる
んるすざくらうるさそしれんだうとのさふやう

此んぐせの北の方のやう
孟 始君の此かりうのよ
ろしころうそ
此くうらとえうてやと
細 物うらうゝゐてくゝり
孟 紅梅の説はすれどもえ
まうぬことる
こんおりせはわどもも
ちうより紅梅の大臣の文
乃うふまのゐへ詞し

たまうちとぞこゝて給へいつれをもつけゆう
（細 紅梅大臣の北の方宮の御方をいふ）
（宮の心也）
しらずがほにてかくれ給へしそこゝろうきを
思ひ隔てゝ人もあれどもこゝし給ふめくべしや
（宮の御方の御物いひ）
とのぞきあかさまへどもえそてうこそは
（細 母上の此宮の御方をいふ）
どうよえにむかり給ふもそらへおかとなめれど
いとうらうて気ありくべうさいらくちく
（三 継父実母の琵琶曲なるごとく）
ゆかしとうつれかしきすれはうてろうてこし
あまさつてしてもものすへこはあまへばけい
（宮の御方）
（孟 宮の姫君の御方也）
へおぼはのよくらし給ばこ宗けうへ
（紅梅の北）
どわてよかしうさ宮うらさぼりはる
れてあられは見ゆゝへの此あかり宮つ

よのなかのひとき
細 路女（ムスメ）はまうる人を
ありうるとそそぬさき
あらし
いとらぶりしく
三 此大君藤氏家の系
文へまかりあよひおもう
夕霧の嫡女の東文は
まうりまうりにて人はさき
まやせましの怨佛ゝ
為徳ゝふさよ
許してゝかり 師びては 細 琵琶を
大君は宮はびくハ堂ゆく
を物しやうつく京篇に
ありて初心うるも苦し
き人ぬまかれぐてし

（三 紅梅の北母女君の事）
もてひめ宮たちと人はさとうしと宮を（おほひ）
どれどこの宮たちを、えてしもきこしずめわら
（宮の北方之）
んぐれへこそ世中ひろきうらいらつく
つくれうぐひあかじと琵おほまつらう
さもとめつゝあかりあかくへ（かう）めうあそいひ
（細 紅梅大臣の詞）
いふしうそひときとあふ月ころうけか
すくちかきはりしさ福よの琴の音ど
（細 中の君）
らま給さうでびきしく始徐よありの西の方
よ給ひとへびくとさうらよいれて給ふさ
（此の本ハこゝもまへひ給を吾も見ひて不用し）
ときのびとうつくや見て給かんなる御
うさ給よ思ふかうようをかくさ花の香
（三 花の詞よこゝ）
まりあすぐくいはうらとゞめてをしへさ
（ふと師のやうあとゝ）

いりしあかしゆう
そのうちらうちろなりしもせ
よあそびしかのうそ
さひかしらかくしと
源中納言　細　薫の異名を
なりそて入らしくら紅梅
とゐ大臣ふかくし竹仏の末子　喉　薫
中納言のかしふみし紅梅も右大臣
三宮にそ附
ようりあやぶまれど嵯峨に
てハいまたこ大納言とのそ
うちりし推かの中将めも

あられり白羨えみくうかり推
嵯峨てて次電混乱なり
別傍女房也り
又せしまいとどびきうで
三　琵琶ハ撥してかなく
わそうる撥るれやうつき
ひつできるすとほれやおみ
ぶるし今の白景く日品
うらり八右みてもまさうう〈々
れぐらしらうみそてやうつう
あうちいやぎいハ夕霧かよ
あつかんとく
けれらしのねことて　三　琵琶
とうしくん一回の絃とこ
とひて　黒柔琵琶を
うらくしの寺　賜川百首
王昭君を図せらるの
よそひらしのとごとた
あてどめく洞か
あさまなりうちらくぐくうえん
女おれしうてせうりしう
喉　小町の寺のごとくてよ
つらねハ女の寺なれハし
とひかれらうりきを図

三　紅梅ぞ乃花さきみてしりそ
世の中へゆきみつりそてすゝ梅かゝる
ふりしとぞそのうちさかりなりしよりま。
盃　紅梅の事助そ見えさんとく
ありひ皆しらしや。こゝちらどりつ
琴琵琶皆ひるきさそこのれうへし
こきまへいおつまつとらぬもいとつきなすくに
候しさかりしまでもとけてともそはさ
三　君の姫君の琵琶のこす　御係殿く
ねし。皆ぐらむ結をくらうれ琵琶のはなれん。
昔覚えし候か。左六条院の作つてへりく。
人太平寺し　名書し　盃　薫
左の御こゝろんひゞ世をおりまへ。ふ源中
盃　白羨之
納言。無アマの実るいごとくも昔の声と
よとうちしうい。と思りとしよりの
紀人てみやかうかひのくとつとりかて。こう
ろし先さかくるさでかりひとしうし

仲々音し
ひとりぐらうとしるん。やどしかんとそしび
杪上
絡つゝとなまかちき。それはことのるこ
の比巴ように　盃　押　手
そいかうく此かしまつれ。ひらく。さそして
三　たの手れ熱しとよき
こ川やうるうとくうてきすりりみろうり。
住とさてひらく
らうきす間とぐらうとうのる面さらり
てる面めつしうえてこうるん女形にこ
盃　紅梅の詞之
とよふくおりくやし。わらうつでのそとで
三　琵琶をれ
さんや。れうしまいれとのゝふ。女房たとど
はくれすうもおさしくうしいとわりさ
ぶらうぶ川がえしそてまうしどきも
細　大臣の詞
りしも。らはまらせそねつれだしそうら梅
人さんくりてるちすゞやとうしぬこさく

こゝにて引出て琵琶　女のそうりうはましもかくきあらはさずともおぼろげならず
真木柱のこと
そこにてまろはしとよみゆへにしも
かはりたせてみられたる
て弾こゑあるよし
ものあはれなるにてまゐりあへ
なれはてさうらひつるここち
うまり　細　直衣姿也　花鳥
上童は童装束の時は総角
をあてとらすとして次第
なれども今は直衣をいふぞ
のゆへにうるはしとかくなし
かうかめして　細　少将にゆ
つりきこえ又は若君にゆづる
也　異本此方にゆづりき
こえて紅梅は麗景殿へまゐ
りぬとくみよりさとの
東宮女御にはゆづりて
紅梅のまゐりぬとて　箋　孟
この若君にゆづるとなく
なお少将ならではゆかりかづれ
そうも

ばかりも
細　嘯なりくそ
めさてさやうなるもし
て梅をとりまふるそ
はやうへうもとい
乳母

しる人ぞしる
花鳥　君ならで
たれにかみせん

大臣の君おほやけざまにてはまゐりたまへれどもしるしのなかに（孟）

ら。わか君うちへまゐらんとのゐ（孟 紅梅の息子）（花鳥 直衣姿）

すがたにてまゐりたまへるわざと（要をとりまとめて）（三同）

うるはしきみづらよりも。いとおかしくみえて

いみじううつくしとおぼしたり。麗景殿（紅梅の女）

に御ことづけきこえ給ふ。ゆづり

きこえてこよひもえまゐるまじくなや（女東宮の御方へ参給）（の詞なり）

ましくなどきこえよとのたまひて笛

すこしつかうまつれ。ともすれば御前の

御あそびにめし出らるゝかたはらいたしや（熟せぬと卑下の詞）

まだいとわかき笛をとうちゑみて

双調ふかせ給ふ。いとおかしうふい給へば、けし（さうでう　秘　簧の調子なし）（紅梅の詞）

うはあらずなりゆくは、このわたりにて（孟　しきとはなくとも）（宮の御方をいふにや）

おのづから物にあはするけなり。なほ（お　細　合奏る　こまつる）（大の姫君へ紅梅）

かきあはせさせ給へとせめきこえ給へ（の詞なり）（赤　大の御方へ）

ばくるしとおぼしたるけしきながら、つま

びきにいとよくあはせて、たゞすこしかき（河　爪弾　三うちひく也）

ならし給ふ。かはぶえふつゝかになれたる声して、こ（弾しあはせぬく）（嘆　うちとけぬ男も紅梅の詞ま会わすなく）

の東のつまに、軒ちかき紅梅の、いとおもしろく（さうぞい　細　春の君と申るなり）（大の御方の御事之紅）

にほひたるを見給ひて、御まへの花、こ（白氏文集）

ゝろばへありてみゆめり。兵部卿の宮、うちに（梅の詞）

おはすなり。一枝おりてまゐれ。しる（細　昔のことおもひ出して）

人ぞしるとて。あはれ光る源氏の。いはゆる御

まじくみそてくるしうして
三 棟梁よき御かたらひ 紅梅
のおほい殿の君の此源氏へ
まかりいでしか此君の
宮の御かたへのかよひとぞいふ
うへやうへそとしのすゑ

よしかうしみも
此源の宮よりくんでち
ば給ひ給ふやくもあるき
し

けづりき人のまされまりて
三 若の宮の君にちかくかし
人のとまぞ此世はおかしき
まさりの御んれ人つれあるき
人ぞとく
いきめぐらふ 孟 生廻之

なげきうのみねあまたの御はしきうしはみ
らんとそのやしまそまうしらひあれさき
こゝしてそのまくそよ御ことうあれ此
宮うちのやよの人もいとこともゆるさし
えげる人はめでられんとおもふつれあり
こゝ海なされどもちかつくみも笑く給へ
ぬハ代ざうひあくらじと思ひし仏の
あしめやありりんだくさこゝめそと出なまうも
しゝのあくせるすくなるしこゝ此げじめさこ人
のどられまりていきめぐらふハ世かはろ
けの命あるきこるなうしゝこそはかなき
ゆれあきし出まてりの哀よ云へく

いうくハせん
源と申すおまりはそう
御しどの御まき、源の給
か給ふも及ばずとても
いくせんせめて此君を
ざらは源のうつくしまとの
らうらべし
おるんか光なるなら
細河海大論を引て
河大論云釈迦佛入涅槃之後阿難登高座結集諸經之時其形如佛仍衆會疑佛再出給阿難未證四果之人也仍阿羅漢等不用之其時阿羅自然現瑞下畧
さうれひじりのあうたを
西ひじりとしハ阿難を云
しきく愚案仏の滅後の
阿難よあらそひて源の
のられ白文をさとしさ
ひかりとうつさてこそ
きこえざるべし

せひめぐりしたまはれ給ふつかでの志乃び
ざさうやおそれおしとていそぎさまひ
らぬ給ふいうくハとんむりしの気しきれは
さうぞんハ此宮ざうりとハ仏のくれ
給ふうんれ名ばかりハ阿難が光をはなち
けんどこくひ出まつりしうたがひさぞうし
きひがうのあうたうどやとまよふさ
なげござるよよさしどうさんりしとて
なありて風の御すみ園の梅よりまず
ぐひそのとはむやおくべくこと紅のくに
よつらやきうきそて此君のかすてんが
そよらりませぬまうらえて出しうて

かりて　細　まり川鶯とあるまり川の字画義あり。猶く先とく
る掛るれバ鶯のとハぬるゆハあらくどとこ。几のしかりをとハ中君のゆとかのめかりてそろへく
暑乾「花のうど几のうつりまさぐつくぞ鶯さそふちゑずまハやる
みとこうろさまとうりませ　師　もぢとの文の様りハちゑのしてをうつくどかりて三人をそ
いうまうやうらぬどうそても自然のかあまり川なり

中君　細　白文中文よ
ま知てまゐる形業よ
ままろり　師　明る中文
のうんのとつかかより
ゑつる文のわが師と
のなれ知のかり

まうご内よかりしまます
白文の林ふ中よおつるを
しんの若つれハとく

三　几のゑありて白ゑを
綿綿　細　白文よ　別まかりこゑ重　挽さあきころるよいつとすれ此ましまま
かしと名く　若君のんし　へバいそぎさまり、まぬ。中君乃
らくの心のかうがねいちげれらのゐどころよ知
縁殊じあり。厳じ人あまりこれをくり
よまりり中よ。ゑりけまそ　盃　白文の調く　晩用ちんあど
いとらく　若君なく　まりそでかしいつまいりつるを
ゐどの縁　ね　若君の色葉く　とくまりそでたぐうかしくや
しきかりやうご内よおりしまするとん
のよつれバいそぎまかりつゐやとれさ

すげゐる掘りしろかれうご　細　二の糸縦のゑくぐ　内ちうゆくぐし　別かかり
盃　白文色葉く　くりやすさ所かもけゆくハわきくべかりしけり
きひとりの。そこよろうとそすしあつま
かさこりつぞとの縁。この名め　盃　白の葉文を内　森井小かく　なる
ちぞうつしひのへバ。人へくバいちらりうをま
いりもぞ。　内君りの義工人の退おぜしもわりく　かまそでちりあどしても。ゑめやう
よめぬれバ去　細　白文の引　文ゆはいと海すってゆる
されよとあかり。　ゐイ　いとあげう　文のく　地中用しまうと
いそめりしと。時なられて　細　若君の引　ひとまろうめ
てとのさまんへん。まり川ハさセまくりしこ
そくるしくましが。　細　白の内中人はハさうふひらりしとく　地中へ少　寸くしいりと安
えさしてあらたれバ。　細　白の引　紅梅大臣を恨みかく　三文の　ねどバんへげるのしと

内らくれてく　細　婦君の
またまうゆまく　師　まい
あへなんまり縁そ清く
若君ののて魚あるを婦
子内とられうろとく武
若君ましつられて言之
人わろきこハ人めわろきを之
ゆゑまうして　白文へあり
まだ追従めさこうつ詞

されバやましくおぼさるゝ也
されどやすからずこそ
我をば人げなしと思ひはなれたるとな
ことはりにてこそ
こそのうへ
あひ思ひ給ひてんや　東の方
まゝ母の御方我もきえられ
ばかりのかひなやすまれ
うらみての後ならましかば
うらむ　師　既ニ書出限
ての後ならばといふ
ハ我へもこなたへ　紅梅
まうのおもとまつらせ
られたることにての
のかみしらで物いへらん
と御返事をかきめす
うらみし
そのほかかへる
園に匂へる　眠　園は白
つるハ細く紅梅と評して
のさかり紅梅は白
ひとしくうるはしのかう
此段は香をも最も奥し
いとおもしく
紅の色とは　同
色の移されて

ことわりなり。されど
やすからずこそ。ふるめかしきおなじ
すぢにて。東ときこゆなるハ。あひおもひ
たまひてんや。しのびてかたらひきこえよ
などの給ふついでに。この花たてまつれバ。うち
ゑみて。うらみて後ならましかば。とて
うちもおかず御らんず。枝のさま花ぶさ
いろも香もよのつねならず。園に匂へる
紅の色にとられて。香なん白き梅には
おとれるといふめるを。いとかしこく
とりならべてもさきけるかなとて御心
とゞめ給へる花なれバ。かひありてもてはや

とられて梅花あるぞこ
とごとの白ハおとれる
後撰
あるじなきやどもえまつでて
抄　藤壺殿へ紅梅のかう
待わびしにもえまゐりつ
ねし
心ありし人の　細　かへらへ
秋の月と花とを同じく
いふらんくもまいらせて
や　眠　心ありし人とハ
八童がいふ白菊のかうを
下心よりて申す也
彼紅梅大臣の昔より
さぶらひ給ふ人ばかり
らうとしき人めとも
あつきの思ふべく
わがかたざま　細　紅梅大臣
ハ我方の中にむすめを
匂兵部卿宮のあひきうと
く　三日　孟　紅梅ハ我むすめを

やし給ふ。今夜はとのゐなめり。やがてこなたにを
とめしこめつれば。春宮にもえまいらず
花もはづかしく思ひぬべくかうばしくて
けぢかくふせ給へるを。わかき心ちには
たぐひなくうれしくなつかしう思ひきこゆ。
この花のあるじは。など春宮にはうつろひ
給はざりし。しらず。心しらん人になど
こそ。きゝ侍りしか。などかたりきこゆ。
大納言の御心ばへハ。我かたざまにおもふべか
めれと聞あはせ給へど。おもふ心はことに
しみぬれば。この返りごと。けざやかにも
の給ひやらず。つとめて。このきみのまかづるに

めでたしとちひ白氏ハ萱の君などとちひあはて 盡がはかなへかめでたしトアリ一説ニ
ゆりふかし 細 白氏の作くらく氏の君ハかくちひことまてら哭日墨翠 白の也
石ハ紅梅のらさしといふこゝろの如く
花の香とは 細 しその事に
いひかけしまかり 三 扱すら
扱身ハ花の香すきとさそ
つれづらさりしく 師 畢下
のかすりわづれらぶしる
別されてくのまふらせ
さそふ紙 細 大臣へ訪せ皆
らで及びべきこうしと
若君よるくひのかく
三 さう〳〵しらずさせそぞて
の家澁ぢとらせぞして
深くこゝろこの姫君ハ
師 駿がらうの姫君ら
むとどうべきこるかられ
どぞれもえ給こども
すきしく
らひわうき海お
のかすは氏の君を白く 細 若君
かうしせらやし給りのく

三 ゆり花ゝまえぬ稀く
づゝよ。るす紙さりるかゝやさしめつく
白
花のうまさそられめづべきさかなわりとはゆ
盡 白氏の君にかかりの事
ぜのうつりにどろぐさまし。や。へさそてる紙いよ
師 ぬやうらのまく
いはらるのじらよ。さうしらをもせで。あ乃び
文をつかいとく
やうよとう人へもとくのまそ。このあいもまのど
白氏へうけてそう
べ。やんごとあすくむつまじうぢましうぢ
三 紅梅の君 三 氏君と此君ハ同腹の兄弟と語りしと也
こゝろの姫君ハこと給るとして。例の
三 氏の君どもく奥深く此ありさま
らうゝらのさ海るれど。わうくハぐらうゝし
とどうりうよおくしや月ちうおもくする
へあきうひわうき海まてこときりしやし也めり

ぬるのしく〳〵へぢ。ひゝしく
おゝ若君の実ハ兄弟の末
つまふへハ同るすうれども
萱の姫君とそしめす
すうぐ去文へまゐりし事
つきとく
わうけふものゝまへさられ
細 大臣の御とおうまかね
譲ありら申あるうとえ
つと
れの身をくらるれうゝが
細 夕霧や紅梅大臣の御家
る家うそしハ実法とそ
まあしく 三 紅梅ゆすぐの
おうそれ実法ぞ。それ
わかれよ御存うととらへ
らの川鬚黒のしと成まて
奇くとなりまく

細 紫 大臣 ハ 山 寺 ……
くゝよ去文あ乃わうとのいと給やうく。りそ
すし給よへうけてはなしくとくへぢなかりしう
三 去文の兄弟と去文へまゐりせ給るとぞ
いとおもぞうらなしうれへこのうやと
三 此文の姫君へ西氏の御息入もおれりしとぞうく
盡 白氏のらうこ語
ぢよかゞうてこぞゐしいや。とぢあのく
よられしさそうれのつゞくるう。これハ桃園
細 夕べまつらせ給
三 中君を白氏のうゝハ兄君にて。ハぢつねどもとえ
のれくつまるれ。ハことをとすうわくさけゆも乃
盡 白氏の数君らく
まうられあまりすきこゝうりうよ四くこゝ
まつうとゆうしうてもとし叟まそしれのお
細 和平 れの
ありあるへのしあり
とく積しう。ことするよへいとりのまあやう
白 氏のく
よれうろ給ともあまふしそかうしうれおざ
化人
日本紀 越人 孟子 孟白氏の也
人よきんよ。ようひまくるれよ後さまあなそ
まめゝうら給らんも。こ前すくあくやうすゝ

かうものゝ　河本の春こそ
細　匂兵ハ天下の匂ひなれ
まへまそしまし御世ハ梅
と匂をまずへし
花中君をまかる
師　家の御庭ホ早下
のなかれハ押
まへし
まかを梅の花
のまへ
細
三
花の
とかひ
とへのとかや
おしと
かそのまひのかはし

おしあてにかうぶりて、みちとせのにほひ
給はましを
もとつかのにほへる君が袖ふれば花も
えならぬ名をやちらさんとすきずきしや。
あなかしことまめやかにきこえ給へり。
まことにいひなさんとおもふ所あるにやと、
さすがに御心ときめきし給て
四
花の香をにほはす宿にとめゆかば
色にめづとや人のとがめん
とや、なほ心とけずいらへ給へるを、こゝろ
やましとおもひゐ給へり。北の方まかで給て、
うちわたりのことのたまふついでに、若君の一夜

細　大納
若君の匂ひ
なり
細
三
三
御若君の
すこし

して、まかり出たりしにほひの、いとをかしかり
しを、人はなほとおもひしを、宮の、いとおぼし
よりて、兵部卿宮にちかづききこえにけり。
むべ、我をばすさめたりと、けしきとり、ゑん
じたりしこそ、をかしかりしか。こゝに、
御せうそこやありし。さもみえざりしを、との
給へば、まことに、梅の花めで給ふ君なれば、
あなたのつまの紅梅、いとさかりに見えしを、
たゞならで、おりてたてまつれたりしなり。
うつり香は、げにこそ心ことなれ。はれまじ
らひし給はん女などは、さはえしめぬかな。
源中納言は、かうざまにこのましうはたきにほはさで

おもしろきの　細　梅ハ天然奇
特なる句のおもしろき源中
納言の句よりいでたる説
なく
残まことをんでしも　三　割注
よ中書をまちらせんの
あれハ何ともみもえ白き
からすとつひ如すゑこと

ふしむひろ　細　此文乃
書く文なりしまるう
しんそのそこうしんも

まいりつる御ありけるとぞひとりごとしたれ
すけ也。おりやちうさるさの世乃縁いふする
ろうしくのみらし。ゆかしさこゝろのこまとわ
しげなるられのなるすれど梅さし給ひあけ
んねこそ表なすれどの君なじくのめそ給
かさらこゝろぞうしるしまらし君へてこそ
まびらげなる給。君のけりさハ梅ぞもちる給
よねびまちらのへれバなすまごゝもこなり。
さてとうち給をぬふ成わくるめでしんまさ
えせつききしんさき御ハさくゝふて筆し
くるすれうらがよの人を明よしきらんあって
まいらすじりひくちれうらこくめにくらし

くしのしたぶひ今めかしきここし御内れしこと
さへおおよつけ。梅壺やうまひきかりもへ
おかた君ハれかさいのとこよちりつへ女
なふてありうりそしを給わりし給よかわわら
君どつゞまいりしき給ひつゞきのびやか
よれ文おれとい納言の君かくらけさ
こゝまでさとぞさしての給こしとおくらハ
とそしさもりらんまうくし給とさらまいとた
しうひきさゞんて。くどひまうへくもわら
ぬるこみしとるげのえ乃祭をつくし給。
うひるけるつく。御方も笑しの給ぞろ
すさされ夜りるとをうけ也バまけしの

かりそめに白文のすけげ
しらかすとあり
八のけわかは夜みじかくそ
も　白のけわかは夜ながらひ
紅梅のあしかるもま
もよからせてみまか
しきものなり

八の宮のひめ君　細　宇治
の中君の事いへばわかり
の君とく離乱とりし
なうかりしひめ君すは八推
二条の宮ともあるなり

まゐやらは地わりしこえ
宮の姫君　白へのすへは宮
宮は方ひとりて見
ぞおもひこ

れんそひてかりかしやむつからもかくれなよ　細 少女
八三条るしまゐひまうり
うちへの此わか夜おもしろくはなそてもこなた
岷 白文の事とあふ
らまいしう地ひえれくとくるごつこしきせ
信頼
まふよるとし宮地のはしける所くあれ
白文の此事え宮の君の中
どいとゆくうとめさなてさひ絵を
河 宇治の八宮桐壺帝の第八皇子
ひ所かくかく八の宮のひめ君もれらるつぎ
しあさへしそていとしきけうまをそから
さ絵のりけするさ此らわのおとく
しきてとも　いとつてまとれとまめや
岷 白文の題よのあふ
るかりけしえてうとくけるこ
細 母宮の
うりよ宮のひで母宮ぞ　もさしつ
此君はをとりあつり
がり少しのみ